

平成三十一年度 学力検査問題

国語

(九時二十五分～十時十五分)
(五十分間)

受検番号

第

番

注意

1 解答用紙について

- (1) 解答用紙は一枚で、問題用紙にはさんであります。
- (2) 係の先生の指示に従って、所定の欄二か所に受検番号を書きなさい。
- (3) 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。
- (4) 解答用紙は切りはなしてはいけません。
- (5) 解答用紙の「印は集計のためのもので、解答には関係ありません。

2 問題用紙について

- (1) 表紙の所定の欄に受検番号を書きなさい。
- (2) 問題は全部で五問あり、表紙を除いて十三ページです。

○ 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(25点)

怪我で野球を続けられなくなった、元エースの立石大河は、甲子園を目指すチームメイトを応援するため、吹奏楽部の不破瑛太郎に協力を願いだした。吹奏楽部は現在、テレビのドキュメンタリー番組で密着取材を受けている。

「立石！ 匿って！」

四時半過ぎに、不破が部室に駆け込んだ。グラウンドでは練習が始まっており、大河は部室で昨日の応援の反省点をまとめていたところだった。部室のドアを開け、不破はサックスを抱えたままその場にへたり込んだ。

「……何が起った？」

もの凄く悪い予感がしてそう聞くと、不破はばつが悪そうな顔で頭を掻いた。

「四回戦の応援に駆けつけるべく、顧問の三好先生に公欠を出してくれないかって頼んだ。」

「駄目だって言われたのか？」

「いや、それが思いの外すんなりとOKが出て、無事四回戦には行けることになった。」

「じゃあ、なんで逃げてきたんだ。」

「日曜に吹奏楽部の練習をサボって野球応援に行き、しかも明後日も行こうとしていることが他の部員にばれた。」

むしろ、よく今日までばれなかったものだ。

「それで、みんなに怒られたのか？」

「主に宮地が怒ってる。だから逃げてきた。」

ゲンナリという顔で、不破が窓辺の長机へと移動する。ここ数日、そこが彼の定位置になっていた。

「頼む、しばらく匿ってくれ。俺は大人しく練習してるから。」

「まあ、いいけど。」

ここで練習する時点で(大人しく)ではないんじゃないか。案の定、不破がサックスを吹き始めた直後、部室のドアがノックされた。

大河と不破が息を殺してドアを見つめると、「入りますよ。」という声と共に、ドアが開く。

入ってきたのは、眼鏡を掛けた三十代くらいの男だった。黒いTシャツにジーンズという格好で、手にはビデオカメラを持っている。黒光りするレンズが、ぎろりと大河を捉えた。

「げっ、森崎さんだ。」

不破の声に、森崎さんと呼ばれた男性は「げっ、とは何だ。げっ、とは。」と笑った。

「全く。宮地君だけじゃなくて僕まで撒くとは、やってくれるねえ、瑛太郎君。」

「だって、宮地がキレたときの森崎さん、獲物を見つけた猛獣の顔してたから。」

一回り以上年上の男を指さし、不破は仏頂面をする。森崎さんとやらはそれを吹き飛ばすように軽快に笑った。

「そりゃあ、これでもドキュメンタリーを作ってる人間だからね、これは逃しちゃ駄目だって思ったんだ。」

その口振りに不破が溜め息をつき、大河をちらりと見た。

「立石、この人、日東テレビの森崎さん。」

森崎さんが大河に向かって「突然ごめんさい。」と頭を下げる。大河も椅子から腰を上げ、「こんにちは！」と勢いよく挨拶した。不破が今度は大河のことを森崎さんに紹介する。

「じゃあ、今回の騒動の中心人物ってわけか。」

「……そんなに大事になってるんですか?」

「そりゃあ、全日本コンクールを目指す吹奏楽部の部長が、地区大会を前に突然練習をサボって野球応援に行き始めたからね。」

③「こくり、と大河は生唾を飲み込んだ。カメラのレンズが自分に向いている。心臓のあたりに、張り詰めたような緊張が走る。不破の奴、なんでこの状況で普通に振る舞えるんだ。」

「瑛太郎君、そんなに野球好きだったの?」

森崎さんが不破に聞く。

「君は、コンクールに向かって真っ直ぐに突っ走ってるもんだと思ってたから、正直今回のことは僕も驚いたよ。」

「別に、俺はいつだって全日本で金賞獲りたいって思ってますよ。日曜にサボった分、家でめちゃくちゃ練習したんですからね?」

机の上で足を揺らしながら、不破は答えた。

「野球応援もコンクールのためだし、自分のためだし、寄り道してるつもりはないです。」

不破がさらに言葉を続けようとしたとき、落雷みたいな音を立てて部室のドアが開いた。

「やっぱりここにいた!」

怒り心頭という顔の宮地が、不破、大河、森崎さんと順番に視線をやり、深々と溜め息をつく。

その後ろには副部長の徳村もいた。困った顔で笑いながら、大河に会釈してくる。

「瑛太郎、お前、本気で明後日の野球応援に行くつもりか。」

怒鳴り声を必死に押さえつけるようにして、宮地が言う。

「その次もその次も……野球部が甲子園に行くってなったら、甲子園まで応援に行くのか? もし県大会と甲子園の試合が被ったら? 途中で放り出すかもしれないものに協力するなんて、無責任だと思わないか。」

詰問する宮地に、徳村が「まあまあ。」とやんわり間に入る。でも、宮地は続けた。

「地区大会直前の大事な時期に部長が野球応援なんてやってて、一、二年がどう感じると思う? 部長なんだから部長らしく……。」

宮地の言葉を、ざしり、と木材が軋む音が違った。

部室に黒い影が差した気がしてそちらに目をやると、不破が長机の上に仁王立ちしていた。その目は凄く静かなのだけれど、深いところで怒りに燃えている。

「俺も自分がやってることを正しいだなんてちーっとも思っていないけど、それを立石の前で『野球応援なんて』って言うのは違うんじゃないのか? それは、真面目に、本気で、仲間を応援してる奴に対する冒瀆だ。」

不破の声に怒りは滲んでいない。どちらかというところ——ソロバートを高らかに歌い上げているようだった。ドキユメンタリーを見た、誰もいない朝の音楽室でサクスを演奏する彼自身みたいに。

「まあ、確かに、日曜の練習をサボったことはどう考えても俺が悪い。明後日の四回戦、公欠まで取って行こうとしてるのをどう思われようと、陰口叩かれようと、俺が悪い。土下座しろっていうなら土下座でも何でもする。でも、宮地は応援のせいで俺の演奏が下手になったと思うのか? 手を抜いていると思うか? 俺は、野球部が勝つ限り演奏しに行くぞ。一人でもな! そんなもって全日本にも行くぞ。ゴールド金賞獲りにな!」

ざしり。長机が鳴って、揺れる。微かな振動に、彼のサクスが光った。窓から差す夏の日差しに、呼吸でもするように、きらりと。

「大体、俺達の演奏を求めている人がいるのに、それに応えもしないで何がコンクールだ。そんな音楽のどこが美しい。」

《美しい》という言葉に、大河の心臓がどきりと跳ねた。そんな言葉を恥ずかしげもなく吐ける奴、こいつ以外にどこにいるんだらう。

「そういうわけだから。」

官地に、そして大河にそう言って、「ははっ」と笑って、不破は背後の窓から外へ飛び降りた。

「じゃー」と手を振って、そのまま逃亡する。

「コラーっ、えーたるー 逃げるなー」

窓に駆け寄った官地が叫ぶ。そのまま、「呆れた」と彼は長机の上に突っ伏した。

「あの吹奏楽バカっ」

机の天板を掌で数回、ばん、ばん、と叩いた官地は、そのまま溜め息をつく。地の果てまで轟きそうな、盛大な溜め息を。

「やってくれたなあ、立石。」

顔を上げた官地が、大河を見た。

「よくも、吹奏楽部を動かす一番手っ取り早い方法を見つけたもんだ。」

④ 憤った声とは裏腹に、官地の顔はそこまで怒ってはいなかった。むしろ、笑いを噛み殺しているようにさえ見えた。

「それって、官地達もスタンドで演奏してくれるってこと？」

恐る恐る、そう聞く。官地は「今まで何聞いてたの。」という顔で、眉間に皺を寄せた。背後では徳村が応援の手引きを広げ、「三日で何とかかなるかなあ？」なんて呟いている。

「瑛太郎を動かしたことは、そういうことなんだよ。」

大河に歩み寄った官地が、腕を組んで唇を尖らせる。

「野球部だって、どんなピンチでもエースが諦めなければみんな頑張れるだろ？ エースが必死に練習してたら、『俺達も練習しなきゃ』って思うだろ？ 瑛太郎は俺達にとってのエースピッチャーなの。どんなにコンディションの悪い日だって、あいつが笑ってステージに出ていくなら、俺達は大丈夫なんだ。」

一言一言、大河に叩きつけるようにして。

「瑛太郎がやるなら、やりたくなる。瑛太郎ができるって言うなら、できる気がしてくる。だから、やってやるよ。」

大河からぶいっと目を逸らし、官地は応援の手引きを引く掴んだ。「これのコピー、五十部作るぞ。」と徳村に言っ、部室を出て行く。

まるで激しい嵐が少しづつ過ぎ去っていくようで、大河は慌てて部室を飛び出した。

「官地ー」

大河の声に、官地は振り返ってくれた。

「演奏、楽しみにしてる。よろしくお願ひしますー」

声を張ると、「ああ、よろしくな。」という、素っ気ないようなそうでもないような返事がきて、大河は思わず頬を綻ばせた。

そんな自分の横顔を、森崎さんの構えたカメラがしつかりと映していた。

(額賀滯著「ジョックロックに笑え」による。一部省略がある。)

(注) ※冒演……神聖・尊厳なものをおかしげがすこと。

問1 不破が部室に駆け込んできた。とありますが、不破が部室に駆け込んできた理由を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア みんなと練習するよりも、一人の方が効率よく練習できると考えたから。
- イ いつものように大河と話をすることで、平常心を取り戻したかったから。
- ウ 今まで隠していたことが明るみになり、吹奏楽部の練習に居づらくなったから。
- エ 部活動が始まる前に、どうしても伝えなくてはならないことがあったから。

問2 不破は仏頂面をする。とありますが、これは不破のどのような様子を表していますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア これから部員たちをどのように説得したらよいのか、途方に暮れている様子。
- イ テレビ局員にとこまでもしつこく追いかけられ、不機嫌になっている様子。
- ウ 年上の人物に対して、言いたいことをついに言えたと得意になっている様子。
- エ 自分に対して、批判を浴びせる部員たちから逃げ続けることに疲れている様子。

問3 ごくり、と大河は生唾を飲み込んだ。とありますが、このときの大河の様子を次のようにまとめました。空欄にあてはまる内容を、十五字以上、二十五字以内で書きなさい。(6点)

森崎さんに、騒動の中心人物だと言われただけではなく、
様子。

15	25
----	----

問4 憤った声とは裏腹に、宮地の顔はそこまで怒っていなかった。とありますが、ここから、宮地のどのような心情の変化がわかりますか。次の空欄にあてはまる内容を、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。(6点)

はじめは、瑛太郎の行動に対して

25

35
という気持ちに変化した。

問5 本文の表現について述べたものとして適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア 「よく今日までばれなかったものだ」ここで練習する時点で「大人しく」ではないんじゃないかなにかのように、大河の心情が会話以外においても表現されている。

イ 「大河をちらりと見た」大河からぶいっと目を逸らし」のように、擬態語を用いることによって、登場人物の様子や心情が印象的に表現されている。

ウ 「ソロバートを高らかに歌い上げているようだった。ドキュメンタリーで見た、誰もいない朝の音楽室でサックスを演奏する彼自身みたいだ。」のように、比喩と倒置が効果的に用いられている。

エ 「大河の声に、官地は振り返ってくれた」のように、回想の場面を挿入することで、大河と官地の関係性が次第に変わっていったことが象徴的に表現されている。

2 次の各問いに答えなさい。(22点)

問1 次の——部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)

- (1) 至福の時間を過ごす。
- (2) 晩鐘が鳴り響く。
- (3) 毎日怠けずに練習する。
- (4) 改革のコンカンをなす。
- (5) 無限の可能性をヒめる。

問2 次のア～オの中から、受け身の意味(用法)で用いられている助動詞を二つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

来週の日曜日、市民ホールで、地元出身のピアニストのコンサートが開催される。情感が満ちあふれる彼女の演奏を聴くと、自分の幼い頃が思い出される。そして、いつも涙がはらはらと頬を伝って流れる。有名なコンクールで最優秀賞を受賞した功績をたたえ、近々、彼女に市民栄誉賞が授与されるようだ。

問3 次の文の——部と同じ意味を表す四字熟語として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

彼が直面している課題は、ほんの少しの間に解決できるような易しいものではない。

ア 一朝一夕 イ 縦横無尽 ウ 深謀遠慮 エ 日進月歩

問4 次は、埼玉県に住む中学生のAさんの学級で、「新聞の投書記事」をもとに、話し合いを行っている様子です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。(各3点)

【新聞の投書記事】

「お客さん」としてだけでなく

中学生 埼玉 花子

(埼玉県 13)

私の住む埼玉県では、2019年にラグビーワールドカップの3試合が、翌年には

主な対象は18歳以上であった。小中学生については、親子での参加や他の地域の活動も参考にしつつ、取り組みを検討していくとなっていた。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の一部が開催される予定だ。どちらも観戦に行ってみたいのはもちろんだが、ボランティアとして関わってみることに興味がある。

大会ボランティアについて調べてみると、

中学生に参加可能なボランティアの数は少ないかもしれない。だが、世界的なビッグイベントが身近な地域で行われる。せっかくだから、「お客さん」以外の形でも関わられたらうれしい。私でも何かできることはないか、今後も調べていきたいと思う。

話し合いの様子

司会「今日は、この投書記事について話し合います。意見や感想があったら話してください。」
Aさん「私は、この投書記事と同じように、ボランティアに関わることに興味はありますが、そもそも、そういった大きなスポーツイベントで中学生にも参加できることはあるのでしょうか。」

Bさん「私も、中学生が参加するのは難しいと思います。投書記事にあるように、中学生にできる活動はあまりないだろうし、勉強や部活動もあるので時間的にも難しいからです。」

司会「中学生にはボランティアへの参加は難しいのではないかという意見ですが、他の意見はありますか。」

Cさん「はい。投書記事に書かれているように、I のだから、何かお手伝いのようなことでもいいのでやってみたいと思います。活動の自身については、大人と同じようにとはいかないかもしれませんが、取り組めることはあるのではないのでしょうか。」

Dさん「私もその意見に賛成です。ボランティアにはいろいろなものがあります。活動に参加してみたら意外とできた、というものもたくさんあると思います。様々なボランティアをやってみることが大切なのではないでしょうか。」

司会「つまり、まずは中学生でもできるようなボランティアに挑戦してみよう、ということですね。」

Cさん「ボランティアには、道案内をしたり環境美化を行ったりするものもあると聞いたことがあります。」

Aさん「ボランティアにはどんなものがあるのか知りたくなりました。現在、行われているものについて、調べてみるというのはどうでしょうか。」

司会「では、中学生も参加しているボランティアについて、調べて紹介することによっていいでしょうか。」

(1) 【新聞の投書記事】と話し合いの内容をふまえて、Cさんの発言の空欄

I

に

あてはまる言葉を、「新聞の投書記事」から十字で書き抜きなさい。

(2) つまり、まずは中学生でもできるようなボランティアに挑戦してみよう、ということですね。とありますが、この司会の発言は、話し合いの中でどのような役割を果たしていますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 考えの理由を明確にする役割。

イ 出された発言の内容をまとめる役割。

ウ 他に意見はないか求める役割。

エ 話し合いの目的を確認する役割。

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(25点)

食事にはマナーがある。とはいえ、よく知られているように、文化に応じてそのディテールは多様であり、しかも対立することも多い。食器をもつていいか、音をたてていいか、会話すべきか等々、際限ない。

重要なのは、マナーの具体的内容ではない。それぞれの文化において、複数のひとびとのあいだで、何がよくて何が悪いかがということがすでにある。それは、複数のひとびとが、互いの行爲を見あい、聞きあい、触れあっているということからくる事実である。

一人で食事をする場合、一切のマナーを無視して食べているひともいるかもしれない。

ひとと一緒に食べる場合、食べる量や速度を他のひとにあわせなければならぬ分、それで気苦勞は増える。一定量の食料しかないとき、ひとは分けあわざるを得ないわけだが、だれがどれだけ取るか——そこには、さらに緊張が走る。

ケモノたちのように食料を巡って闘争するのは、全員にとって不利益である。勝ったものが一人で多く食べるにせよ、急いで用心しながら食べるため、満足度はその量には比例しないだろう。適切に分配されれば安心感があつて、量が多かつただけよりも満足度は大きいだろう。一緒に食べる場合に量や速度をあわせることは、安心を増やし、気遣いを減らす。

正しいマナーを教えようとするひとは、マナーを知らないひとや、マナーを修正しようとしないうひともままして避けるべきである。そのようなひとは、マナーを語る際のマナーを知らない——マナーの正しさは、ルールの正しさとは異なるのである。

なるほどそのひとの教えは、マナーを知って相手に失礼のないようにしようという姿勢のひとは役に立つと思われようが、そもそもそうした知識によつて失礼がないようにすることができると考えること自体が失礼である。

マナーは、ただひとの真似をするようなものではないし、覚えておいて自分がセレブであるかのように見せかけるためのものでもない。マナーとは、理由はともあれ、その場で相手のやり方にあわせようとするこゝなのであつて、文化が異なれば相手のマナーも異なることを互いに前提して伝えあおうとするコミュニケーションのことでもある。

重要なのは、マナーをルールとして覚えることではなく、マナーの違うひとをマナーが乏しいひとと取り違えないようにすることである。マナーが乏しいひとは、自分のマナーばかりに執着するひとと同様、一緒に生活や仕事のできないひとであるから遠ざかった方がよいが、マナーが異なつていても、それをみずから修正しようとするひとなら、かえつて愉快的な生活や創造的な仕事ができるだろう。

特定のマナーを知っているかどうかは二義的であり、マナーをもつており、かつ相手のマナーがあることも尊重して、それにあわせようとするのが最大のマナーなのである。

したがつて、徳はマナーにある。マナーの基準は美醜である。「汚いこと」はしたくないように、正義は美しく不正は醜い。したがつて、マナーというものは、それにのつとつていないひとがいたとしても、そのようなひとを非難するようなものではなく、「ノーブレス・オブリッジ(高貴なひとの義務)」として、むしろのつとつているひとを賞賛すべきものなのである。

たとえば、対向車や周囲の車の動きを微妙に感じとりながら、危険を回避しつつ緩みなく運転するということをしないひとは、マナーがないというよりは、車を運転する周囲のひとへの感受性や、そのひとたちの運転の仕方にあわせる技量がないのである。マナーの欠如は、マナーの否定や無視ということではなく、感受性や技量が不足しているともいえる。

それでも、それを「見える化」して、すべてルールとして明快に規定せよと主張するひとも出てくるであろう。そのことは、自動車は道路の左側を通行すべきであると言われようである。それは道路交通法という「ルール」によるものではないかと思われるであろうが、そもそもどちらかに決めておかないと自動車は正面衝突してしまう。江戸時代、武士が刀の鞘さやがふれあわないうようにと左側通行をしていたマナーのように、その意味では、道路交通法は、マナーを明文化したものであるといえる。

しかし、一旦ルールが決まったとなると、別のことがはじまってしまう。

シルバースーツが設定されて以来、「年寄りはシルバースーツに行け」という若者や、「若者はシルバースーツに座るな」という年寄りが出てきた。そのわけは、それがルールと解されたからであって、「ルールに反していること」が気になるようになることに、ルールに反しても構わないと考えているひとがいるという想像だけで、怒りという別の情念が生じるようになったからである。

そのような情念は、体の弱いひとは席を譲ろうという、従来のマナーには伴ってはいなかったはずである。マナーに反するひとへの、ただマナーに反しているからという怒りは理不尽であり、そこには

I

ルール化されたマナーは、マナーとはあきらかに異なっている。ひととおなじようにしていれば、食物を得られたり、危険を避けたりすることができることが多いのだが、ルールとなればその利害損得を考えはじめ、その瞬間に、そのひとはマナーを外れてしまう。それは、ちよとど、善をなしたひとが、それを口に出した瞬間に「偽善」、すなわちひとから評価されるためにそれをしたということになってしまうと同様である。

さらには、たとえばトイレに行列を作るというルールが定められたとしたら、それは、割り込みをすれば他のひとよりも早くトイレが使えるという新たな行動を可能にする。ルールが言葉で明確にされた分、その反対のことも明確にされてしまい、マナーとしてはなすべきではなかったことをしようとするひとたちが出現する。

「ルールは破るためにある」というひともいるように、ルールができれば抜け道を探すひと、そのグレイゾーンを活用するひとが出てくるし、そのルールを前提に新たな行為を企てようとするひとも出てくる。それを避けるためにあえて表現の曖昧なルールが定められるとすれば、それはどんな行為なのかの解釈が分かれ、いよいよ他のひとに、それぞれの都合や心情で、非難したりしなかったりするという、想定外の行為を生みだしてしまう。

④ ルールとは、厳密に定義しようと、あえて曖昧に定義しようと、必ず弊害が生じるといふ扱いにくいものなのである。

そのわけは、ほかでもない。ルールが言葉で制定されるからである。ルールは、マナーのように曖昧だったり内容が変動したりしないように、言葉によって明示されるが、その明示のための言語のルールが別途にあつて、それで二重化されてしまう。言葉によつてたてられたルールは、言葉の適用についてのルールによつて、もはや、単にマナーを明示したものでなくなつてしまふからなのである。

(船木亨著「現代思想講義」による。一部省略がある。)

(注) ※ディテール……詳細。細部。

問1 ^① それで気苦労は増える。とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 配分を平等にするか、条件によって不平等にするかということに、苦心するから。
- イ 一緒に食べる相手が何を食べているのかが気になって、安心感を得られないから。
- ウ マナーは個人によって様々なものであるので、相手を満足させることは難しいから。
- エ 食べる量や速度について、一人で食べる場合よりも気を遣わなくてはならないから。

問2 ^② 正しいマナーを教えようとするひとは、マナーを知らないひとや、マナーを修正しようとしていないひとにもままして避けるべきである。とありますが、これは、筆者がマナーをどのようなのだと考えているからですか。次の空欄にあてはまる内容を、三十五字以上、四十五字以内で書きなさい。(6点)

マナーにおいて大切なことは、

35	
----	--

ことは存在しない、と筆者は考えているから。

45	
----	--

ことであり、決まりましたマナー

問3 ^③ 一旦ルールが決まったとなると、別のことがはじまってしまう。とありますが、ここでの「別のこと」にあてはまらないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア マナーのときには伴うことのなかった別の情念が生じてくること。
- イ 損得によって行動すること、もはやマナーではなくなる事。
- ウ ルールとは反対の内容についても、意図せずに明らかになること。
- エ ルールを守るための行動が非難され、想定外の行為を生み出すこと。

問4 本文中の空欄 I I にあてはまる内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア ルールとマナーの混同がある
- イ ルールとマナーの区別がある
- ウ ルールの基準が存在する
- エ マナーの基準が存在する

問5 ^①ルールとは、厳密に定義しようと、あえて曖昧に定義しようと、必ず弊害が生じるという扱いにくいものである。とありますが、筆者は、ルールについてなぜ扱いにくいものだと考えていますか。次の空欄にあてはまる内容を、解釈、二重化の二つの言葉を使って、四十五字以上、五十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(7点)

ルールは、言葉によって定められることで、					
55		45			
という弊害が生じるから。					

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(.....の左側は口語訳です。)(12点)

近ごろの歌仙には、民部卿定家、宮内卿家隆とて、一双子にいはれけり。そのころ、「われも、われも。」とたしなむ人多けれど、いづれも、この二人には及ばざりけり。

ある時、後京極摂政、宮内卿を召して、「この世に歌詠みに多く聞ゆるなかに、いづれか勝れたる。心に思はむやう、ありのままにのたまへ。」と御尋ねありけるに、「いづれも分きがたく。」と申して、思ふやうありけるを、「いかに、いかに。」と、あながちに問はせ給ひければ、

ふところより畳紙を落して、やがて籠り出でけるを、御覽せられければ、
たたくみ 畳紙を落して、かご やがて籠り出でけるを、
おんみ 御覽せられければ、
おんみ 御覽せられければ、
そのまゝ そのまゝ退出した

明けばまた秋のなかばも過ぎぬべし
 かたぶく月の惜しきのみかは
 と書きたりけり。

これは民部卿の歌なり。かねて、かかる御尋ねあるべしとは、いかでか知らむ。もとよりおもしろくて、書きて持たれたりけるなめり。これら用意深きたくひなり。

問1 ^①問はせ給ひければ とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、すべてひらがなで書きなさい。(3点)

問2 ^②御覽せられければ とありますが、この主語を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 民部卿定家 イ 宮内卿家隆 ウ 後京極摂政 エ 作者

問3 ^③かかる御尋ね は「このようなお尋ね」という意味ですが、ここではどのようなことを尋ねたのですか。 次の空欄にあてはまる内容を、十五字以内で書きなさい。(3点)

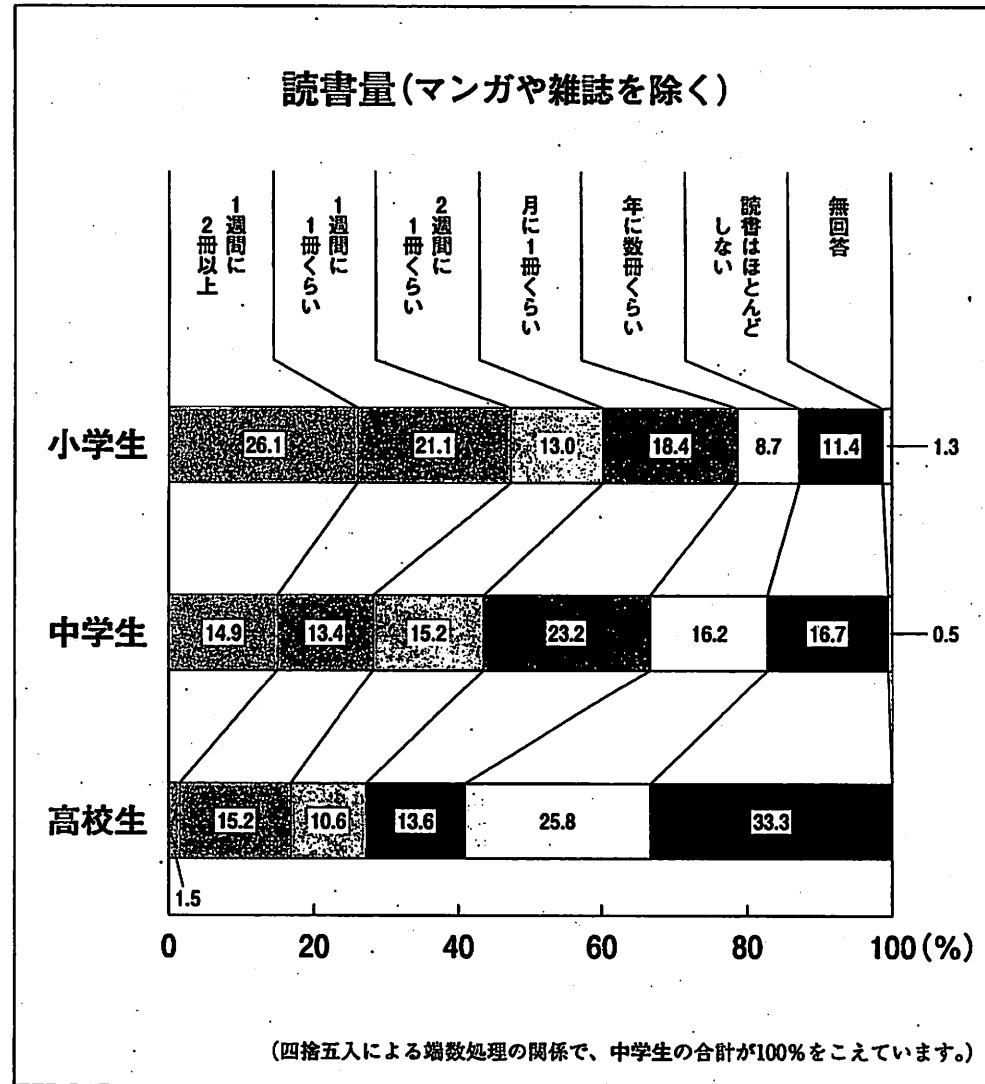
ということ。

問4 ^④用意深きたぐひ とありますが、これは、宮内卿家隆のどのような行為に対して述べたものですか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 事前に書いて持っていた自分の歌を、目につくように落としたりした行為。
イ 素晴らしいと思っていた歌を、紙に書いて持ち歩いていた行為。
ウ 覚えていた民部卿定家の歌を、すぐさま詠んで披露した行為。
エ 答える代わりとして、即座に歌を紙に書いて差し出した行為。

5 次の資料は、「読書量(マンガや雑誌を除く)」について、県内の小学生、中学生、高校生を対象に調査し、その結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「読書を推進するための取り組み」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。(16点)



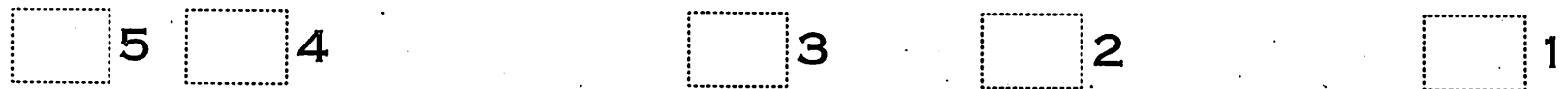
【平成28年度「埼玉青少年の意識と行動調査」報告書】から作成

(注意)

- (1) 段落や構成に注意して、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえて書くこと。
- (2) 文章は、十三行以上、十五行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

(以上で問題は終わります。)

国 語 解 答 用 紙 (1)



（作文は解答用紙(2)に書くこと）

問 4	問 3	問 1	問 5			問 3	問 2		問 1	問 4	問 2	問 1		問 5	問 4		問 3	問 2	問 1
※	※	※							※	(1)	()	(4)	(1)	※			※	※	※
				45		45				(2)	(と)			25	25				
							問 4				(め)		(2)						
		問 2									(る)		(3)	35				15	
			55								(ず)								
														35					

得 点
※

受 検 番 号
第 番

5

15

13

国 語 解 答 用 紙 (2)

受 検 番 号
第 番